美術アート

11月展評

「情感」を線で抑制…城間
観客に熱っぽさ…やんばる展

対談
与儀達治（県美術家連盟会長）
稲嶺成祚（琉大美工科教授）

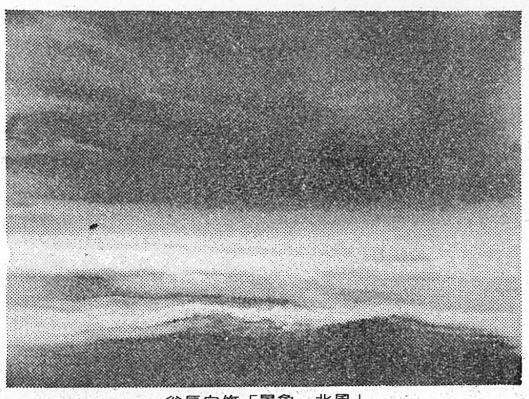
画面に密度が出る

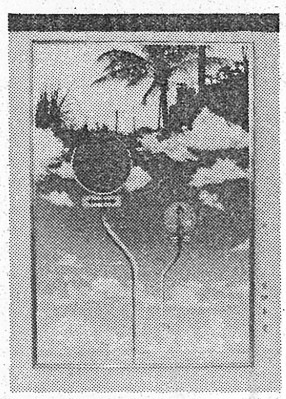
稲嶺　確かに彼は、今年に入り急激によくなった。奨励賞の宮城孝也「雑草の中より」は、遠近が出てきた。より具象性が強まった。

与儀　そう、線描からスクラッチへ手法を変えた分、前のち密さはなくなった。そろそろモノとしての革から離れてもいい。自分を激しくぶつけているのは、同じ奨励賞の伊元隆一「部屋の中V」だ。フォルムの処理をもう少し考えてもいい。

稲嶺　アクリルのマチエルは丸くなるんですよね。その丸さが少しマチエルをにぶくしている。彫刻の奨励賞は上江洲由郎「作品B、C、E。紡錘体から柱状になり、角が出た。ただ、鉄板の台は、作品全体との調和をもっと考えてもらいたい。

与儀　三本の空に伸びる柱が、ふしくれ立つのでなく、もっとスマートに、ねじれていけばいいと思うが、素材的に無理なんだろうか。


翁長自修「景象・北風」


川平恵造「NOW—」

稲嶺　入選作では、吉川雅浩のきり絵風の作品が異質でおもしろい。ベテランの大浜用光さんが、久しぶりに登場、いい仕事を見せた。版画の大城勝もことしになってよくなっている。

与儀　新里義和は、マチエルをがっちり固めスクラッチで描く。色をほとんど使っていないが絵画性は十分だ。フォルムもきれいだ。名波大の大胆な構図も注目に値する。ほかに、身近な素材を使って描いている具象系で印象に残ったのは、比嘉繁富、高江洲盛一、仲宗根勇吉、比嘉英男…。

稲嶺　比嘉良博、新人じゃないが上原勲、異質な方で宮…分の作品を確立し、作りあげてきた証明だ。

求心的に内面見る

◆永津禎三個展＝1～23日、画廊庁＝

稲嶺　テンペラ画とデッサン、オブジェと三種あった。おもしろいのは、それぞれに独立した作品でありながら、ある程度つながりがある。オブジェも自然物と人工物、固いものと柔らいものといったコントラストのある物体を一つの〝箱〟に入れ、異様な雰囲気だ。彼のねらうシュール風な感じがあって、タブローへとつながる。

与儀　そう。様式はそれぞれ違っても、少し幽玄な感じを持っている。彼は求心的に内面を見つめていく傾向が強い。

精力的な活動

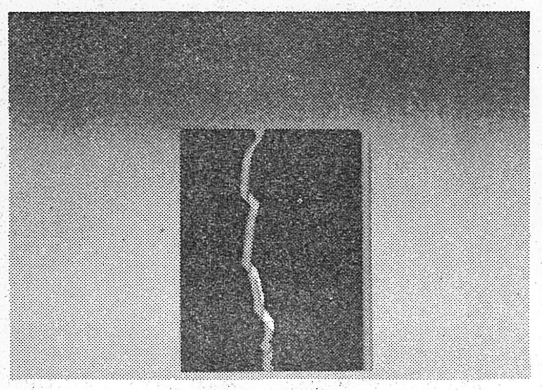
◆城間喜宏・古代幻想展＝15～20日、県民アートギャラリー＝

与儀　城間はことし二度も個展を開き、精力的な活動だ。

稲嶺　青で空間を埋め、白の部分がなくなったのが今回の特徴だろう。それと、象形文字風のマチエルの部分と線による区切りの一致がなくなり、ずれてきた。

与儀　その文字風に、これまでにない表情ができた。これまで情感をむしろ排除していた。

稲嶺　前の有機と無機シリーズでは、格子状の線が無機、その中を埋める暗い色の情念ぽいマチエルを有機、と一応考えられた。あの傾向はずっと続いていて、円弧や四角線は昔の格子の変ぼうだし、その中に情感の強いものを埋め込んでいる。ただ、「情感」がずっと広がるとアンフォルメル風になるわけで、それを線で抑制させている。構図も左右対称がずれたり、戻ったりしている。左右対称だと、真ん中において迫力、安定感が出る。逆に、ずらすと空間との緊張感が要求される。


和宇慶朝健「monument B」

心象における自然

◆翁長自修個展＝22～27日、沖縄物産センター画廊＝

与儀　変化をずいぶん感じた。林、海、空が分離し現れ、自然という意識が強まった。具象的になっていないか。

稲嶺　筆づかいが細かくなった。いわゆる絵の具の流れにまかせてはできないところができてきた。かつて沖縄水彩画展（七〇年、宮城健盛、玉那覇正吉、翁長、稲嶺）に参加して、彼は〝水彩なりの様式をつくるべきだ〟と主張し、油絵と同じ手法で描く水彩画には批判的だった。それからですね、彼の水彩風な、今はアクリルですが、芒洋とした作品が出てきたのは。

与儀　自然への意識はあっても、あくまで彼の心象における自然現象なんだな。

県展にも影響が

◆やんばる展＝3～6日、名護高校＝

◆田中初子水彩展＝13～12月4日、沖縄市製茶ランダム＝

与儀　「やんばる展」では、まず観客の熱っぽさを感じた。観客が地域の総合展を盛り上げている。山原の絵画活動は年々盛んで、その影響は県展にも現れ、県展の女性入選者のほとんどが「やんばる」のメンバーだ。

稲嶺　宮城和邦や孝也らユニークな人たちが出てきましたね。

田中さんには、二つの系統があって、「ブルーアゲイン」の四角っぽい、彼女の油彩作品に通ずるものと、「ブルーファンタジア」。

与儀　そう、戯画風なストロークの自由なものね。

稲嶺　いずれも透明感があって、きれいでしたね。彼女らしさは、抑制のきいた四角っぽいモチーフにあるのではないだろうか。